

魔法の宿題プロジェクト最終成果報告書

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 鏝田 マリ 児島 由紀子 所属 中央区立有馬小学校 通級指導学級 記録日:2017年2月9日

キーワード: ~「伝えたい」意欲を高めるために~ コミュニケーションの苦手さ 読み書きの困難

【対象児の情報】

・学年 2年生

・障害名 注意が散漫で多動傾向にある。読み書きに困難さが見られる。

・障害と困難の内容

- ・文字を1文字ずつ読むため、文章全体の意味を捉えることに困難さがある。
- ・思いを伝えたいが、相手から質問されると話を止めてしまう。
- ・漢字を読んだり書いたりすることに困難さがある。

【活動目的】

・当初のねらい

- ・伝える喜びを知り、自分から気持ちを伝えようとする意欲を高める。
- ・自ら文章を読もうとする意欲を高める。

・実施期間

平成27年4月～平成28年2月

・実施者

鏝田 マリ 児島 由紀子 (共同研究者)

・実施者と対象児の関係

通級の担当教員

【活動内容と対象児の変化】

●対象児の事前の状況

- ・人は大好きで人なつっこいところがあるのに、1年生の2学期頃までは、1人で遊ぶことが多く自分から声をかけて遊ぶことが少なかった。
- ・読みに困難さが見られる。単語を語句のまとまりとして捉えて読むことができない。そのため、苦手意識も強くなってきている。
- ・書くことについては、平仮名やカタカナは書ける。漢字も単体でなら捉えて書くことができる。(時々、線が1本足りないことがある)
- ・学級では、積極的に発言する姿が見られるが、語彙の課題から回答がずれていることが多い。
- ・日常生活でも情報をまとめることができず、伝えたいことが正確に相手に伝わらない姿が見られる。そのため、気持ちを伝えることを諦めるようになった。

●活動の具体的内容

- ①「読み」を支えるツールとして→Keynote、SimpleMind、デジタル教科書を活用。
- ②「伝える」を支えるツールとして→Palu、NoteShelfを活用。
- ③「漢字の読み」を支えるツールとして→SimpleMind、漢字Jを活用



●対象児の事後の変化

①を通じて「読み」を支える。

◎1年生の時から国語の音読や絵本を読む際に、1音ずつ読む姿が見られた。しかし、始めに耳で聴いてから読むと文章を滑らかに読むことができた様子から、単語を語句のまとまりとして捉えることが苦手であると考えた。さらに言葉をカテゴリーごとに分類することが難しい姿も見られた。例えば、玉ねぎ、キャベツ、ニンジン、猿、犬、猫をカテゴリーに分類した際には「食べられるもの」「食べられないもの」と分けた。このことから、本児独自の思考があると考えた。そこで、言葉のイメージがもてるように「絵と文字を一致させる」「音と言葉を一致させる」「言葉から連想する」取り組みを行ってきた。

☆具体的な活動内容

- ・ **Keynote** → 絵と言葉を一致できるように、児童の身近な言葉に絞ってマッチングを行った。
- ・ **SimpleMind** → 言葉のイメージを想起しやすくした。また、連想しりとりをすることで言葉のイメージをしやすようにした。
- ・ **デジタル教科書** → 教科書の読み上げ機能を活用し、音と言葉を一致させていった。
(本児の在籍校にてデジタル教科書を活用していることから、同じデジタル教科書を活用することがよいと考えデジタル教科書を活用した。)

☆結果

Keynote の活用を通じて

- ・ 視覚教材を使用することで、言葉のイメージがつきやすくなった。



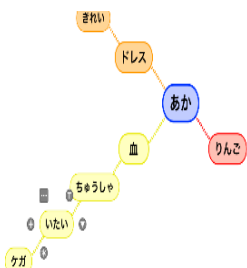
(例)
「トマト」「トンボ」のどちらが正しい名前かを選ぶ活動。本児の生活に根差した野菜の名前を題材とした。最後に「野菜」とカテゴリーを選び、物の名前とカテゴリーを分かりやすく提示した。



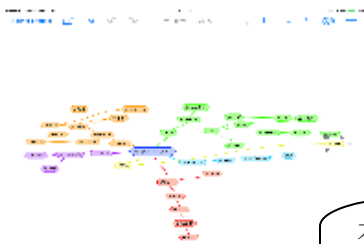
SimpleMind の活用を通じて

- ・ 言葉からイメージしやすくなると、言葉から連想して次の言葉を繋げていくことができるようになった。

1学期始め



2学期後半



本児の感想

「う～ん どんな言葉にしようかな？」
「こんなにできたよ！」

デジタル教科書の活用を通じて

- ・デジタル教科書は、読み上げる場所に色がついていくことで単語のまとまりを意識することができた。また、言葉の正しい読み方を聞くことで、1音1音言葉を読み上げていたのが、単語を語句のまとまりとして読めるようになった。
- ・教科書や絵本の文章を、単語を語句のまとまりとして区切りを意識させることで、まとまりを捉えることができるようになった。初見で文章を区切らなくても、語句のまとまりごとに読めるようになった。

②を通じて「伝える」を支える

◎1年生の頃は、1人で遊ぶ姿が多く見られた。(特に在籍校で) 通級指導学級に来ると、積極的に人と関わろうとする姿が見られ、在籍校とのギャップを感じた。日常の本児との会話で質問と答えがくい違ふことがあった。本児の発言に教師が質問を返すと、「もういいや」「やっぱりいいや」と伝えることを諦めてしまう姿が多く見られた(家庭でも同様であった)。例えば、教師から「どんなことをして遊んだの?」と質問されると、「カマキリや蛇がいたよ。」と返答した後、「もういいや。」と話を続けようとはしなかったことがあった。このような実態から、本児は伝えたい事が上手く言葉にできず、相手に伝わりにくいと感じる経験が多く、伝えることを諦めてしまっていると考えた。そこで、まずは相手に伝わったとの実感をもてるようにすることを目標とした。その手立てとして、本児の得意な絵を活用して、自分の伝えたいことを言葉だけではなく絵で補足して、相手に伝わったと感じられるような活動を行った。

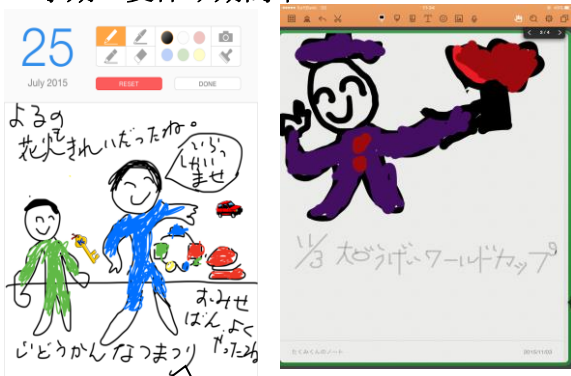
☆具体的な活動内容

- ・ **Palu**→絵や写真、文字で日記を作成し、母親に1日の出来事を伝えた。母親は、文字で感想を書き込む活動をおこなった。(期間1学期～夏休み期間中)
- ・ **NoteShelf**→「文字で伝えたい。」との本児の希望により、絵と文章、写真で日記が書けるアプリを2学期から活用した。

使用したアプリ



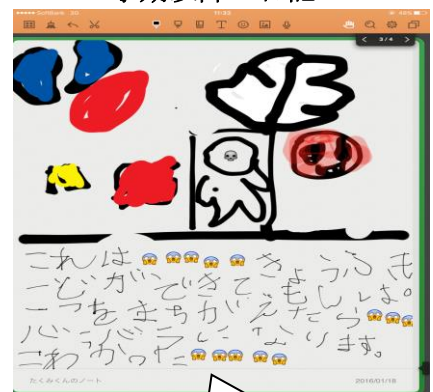
1学期～夏休み期間中



本児の感想

「忙しいお母さんに、あったことを伝えられて嬉しい。朝起きたら一番に見るんだ。」

2学期以降の日記



本児の感想

「どんなこと書こうかな?」
「いっぱい書くことあるな〜。」

☆結果

Palu、NoteShelf の活用を通じて

・母親との絵日記交換を日々行うことで、本児は自分の伝えたいことが言葉の表現だけでなく、絵を活用して伝えることができると実感できた様子であった。2学期になり、本児から“母親だけでなく、友達や教員に対しても「もっと伝えたい。」「知って欲しい。」”という発言が多く聞かれるようになった。また、通級指導学級に来た時も、絵を描いて自分の伝えたいことを自ら伝えようとする姿が見られるようになった。



校外学習での思い出を絵と言葉で教えてくれている様子。



本児が好きなキャラクターが持っている剣を、教員に絵を描きながら教えている様子。

本児から、絵だけでなく**文字でも伝えたい**との要望があったため、絵日記を文字が多く書けるアプリ (NoteShelf) にし、2学期から取り組んでいる。在籍校の担任より「苦手だった短文作りができるようになった。」との話があり、文字で伝えようとする姿が見られることが分かった。

③を通じて「漢字の読み」を支える

◎本児は普段、黒板に書いてある漢字の曜日や月は読むことができるが、教科書やワークシート等に文字で表されると読み書きが難しい様子が見られた。また、他の漢字は簡単な漢字でも思い出すことが難しく、分からない漢字の箇所ですら固まってしまうことがあった。

☆具体的な活動内容

- ・**プリント学習**→漢字の意味を覚えやすくするために、絵と漢字が一緒に書いてあるプリント学習を行った。
- ・**デジタル教科書**→漢字の読み方を知るために、読み上げ機能を活用した。
- ・**SimpleMind**→マインドマップを活用し、カテゴリーごとに漢字を書いていき、漢字を想起しやすい活動を行った。
- ・**漢字 J**→ 分からない漢字をそのままにせず、すぐに調べて読み書きできるようにするために、辞書アプリを活用した。

☆結果

プリント学習の活用を通じて

・絵と漢字を組み合わせたことで、漢字の意味とイメージが想起しやすくなり、漢字を記憶できるようになってきた。

デジタル教科書の活用を通じて

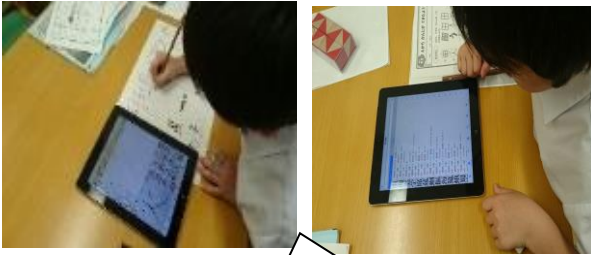
・デジタル教科書の読み上げ機能を活用したことで、音と漢字を一致させ、漢字の読みを記憶し、文章中の漢字が読めるようになった。

SimpleMind の活用を通じて

・マインドマップを活用したことで、漢字を想起しやすくなっている様子がみられるようになった。

漢字Jの活用を通じて

・漢字Jを活用し、分からない漢字があるときは、自分で漢字を調べて読み書きできるようになってきた。



分からない漢字を自分で漢字アプリを使い調べて書いている様子。(通級指導学級)

使用したアプリ



1 学期最初の頃の漢字の想起



本児の感想

「う～ん 思い出せない・・・」

2 学期に入ってからからの漢字の想起



本児の感想

「数字の漢字を集めよう」
「出と口で出口ができた」

【報告者の気づきとエビデンス】

●主観的気づき

読むことを支える

デジタル教科書等の読み上げ機能を活用したり、単語のまとまりを区切る活動を行ったりしたことで、言葉のイメージと音の情報を補い、単語を語句のまとまりとして捉えながら文章を読めるようになった。

伝えることを支える

母親との交換日記の中で、得意な絵を使いながら思いを伝え、それが伝わったとの自信をもてたことで、さらに“伝えたい”という意欲がもてるようになった。また、母親だけでなく、友達や担任にも「伝えたい」という思いをもてるようになった。

漢字の読みを支える

漢字アプリの活用によって、分からないことがあっても、調べることで解決できるということに気付くことができた。また、マインドマップを活用することで、言葉の関連性が整理しやすくなり、想起しやすくなった。本児からは、「こんな漢字ができたよ。」「漢字の練習をもっとして読めるようになるんだ。」という発言が聞かれるようになった。

●エビデンス(具体的数値など)

児童の発言から

・以前は“伝わらないのでは”という気持ちから、「いや、いや・・・。」と伝えることをためらったり、諦めたりする様子が見られた。2学期以降は、絵日記を通して、絵を活用した伝え方を知り「ねえねえ聞いて！」と積極的に自分の好きなことや思いを伝えようとする発言が増えた。

・マインドマップを活用しながら“数に関係のある漢字”等、意味の関連性に注目しながら漢字で書く言葉を整理していった。平仮名で書かれている言葉に合う漢字を思い出して書いたり、選択肢の中から正しい漢字を選び取ったりできるようになり、本児から「漢字をもっと練習したい。」という発言が聞かれるようになった。



2年生 1 学期頃は、読み書きも含めて約 15 個の漢字を使うことができた。2年生 2 学期以降には 1 年生の漢字のうち約 64 個を読み書きできるようになった。

担任の気づきから

・言葉に対するイメージをもてるようになったことや、単語のまとまりを捉えられるようになったことで、文章を滑らかに読むことができる様子が学級でも見られ、担任からは「上手に読めるようになったね。」「1 学期は作文を書くのに時間がかかったが、今では、すらすらと書けるようになった。」という感想を聞くことができた。

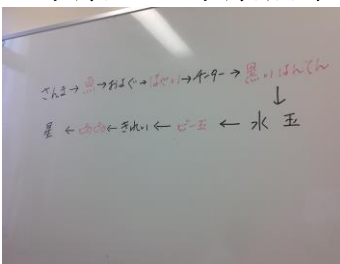
保護者の気づきから

・滑らかに読めるようになっただけでなく、言葉に対するイメージをもてるようになったことで文の意味を理解しながら読めるようになり、感情を込めて読む様子が家庭でも見られるようになった。母親からは「あんなに読むことが嫌いだったのに、本当に上手に読めるようになった。」という感想を聞くことができた。

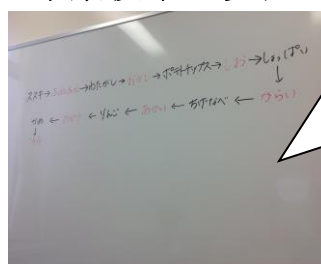
指導場面の本児の姿

・マインドマップの活動に関連し、通級担任と本児で連想しりとりという取り組みを行った。言葉をイメージしていく活動をする中で、想起しやすい力が身に付いてきた。また、通級担任から初めて知る言葉を聞いたり、自分が想起した言葉の意味を確認したりすることで、語彙の蓄積につながった。

1 学期～ 2 学期前半



2 学期後半～現在



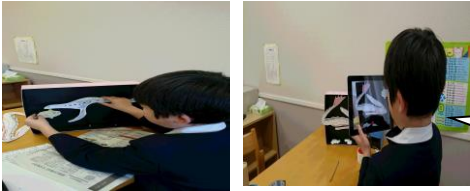
◎連想しりとり

黒字→教員 赤字→児童
本児の言葉から

「先生に負けたくない。いっぱい連想したい。」との発言が聞かれるようになった。

●その他のエピソード

活動を通じて、「伝えたい。」との意識が高まり、3学期の通級指導学級のまとめの会に向けて、「大好きな魚を紹介する。」という活動に取り組んでいる。自分でタイトルを決めたり、どのように発表すれば一番伝わるかを考えてスライド作りをしたり、友達のリアクションを予測しながら写真の角度を決めたりしている姿が見られるようになった。スライドに合わせる原稿も、できる限り知っている漢字を使いながら書いたり、分からない時は自分から漢字を調べて原稿を書いたりする姿が出てきた。また、読み方が不確かなものにはフリガナをつけて、「本番でも間違えず読めるようにフリガナをふってあげれば大丈夫。」と漢字を使うことへの積極的な行動が見てとれるようになった。これらの姿から、気持ちを伝える方法の広がりや成功体験の積み重ねによる前向きな姿勢が出てきたと感じられる。

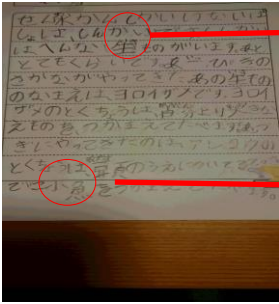


児童の感想

「これでいいかな?」「写真撮るのが難しい。」

「リュウグウノツカイを一番伝えたい。」

「みんな、すごいねって言ってくれるかな?」



いきもの→生きもの

こざかな→小魚

※読むときに読めないかもと言って、自分で漢字の上にフリガナをふって本番で読めるようにしている。

・その他の教科へ波及

算数の文章問題を解くときに文章だけで分からない時は、絵を描いて文章内容を理解し解答している姿が見られるようになった。



算数の文章問題に対して絵を描いて文章を理解し計算式を立てている様子。

「リンゴが5個でキャベツと合わせて7個だから。」

○今後の課題について

・これまでの取り組みから、「伝える」ことへの意欲が高まり、多くの人と関わる機会が増えてきたことで、新たな課題が見えてきた。会話や文章でも、内容が複雑になると読み取ることが難しく、戸惑う姿が見られるようになった。今後は、互いに通じ合う喜びを実感して欲しいと考えている。そこで、言葉の調べ学習の拡大や、画像等を活用しながら単語の意味を理解していく活動を行っていく。